



# 近代文学研究叢書

## 第七十卷

昭和女子大学

近代文化研究所

近代文学研究叢書

第七十卷

平成7年11月30日 初版印刷発行

定価 6,180 円 (本体 6,000 円)

著者	昭和女子大学近代文学研究室
発行者	外山 滋比古
印刷所	大文堂印刷株式会社
発行所	昭和女子大学近代文学研究室 東京都世田谷区太子堂一丁目七番 電話 03 (三四一一) 五一二九番 振替口座 〇〇四一三一七〇八六七

ISBN 4-7862-0070-0 C3091 P6180E

# 目次

口 絵	二
『近代文学研究叢書』の成立	二
凡 例	五
白 田 亜 浪	七
原 石 鼎	二一
蒲 原 有 明	三五
PROFILES	四六
卷末付記	四九
第六十九卷年表補遺	四九
索 引	五〇

## 『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて四十五冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見鳳吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となつている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社をおこして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶりであり、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文獻の甚大なカードの作成には日本文学科の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の实地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、本叢

書はこの特色をそのまま踏襲している。すなわち、文学者の遺族を訪ね墓所や遺跡を踏査することによって、業績を含めたその全体像を闡明しようとするものである。また、著作と資料に関する年表調査も平行的になされ、網羅的な資料蒐集に意を注いでいる。業績については各専門分野における学界の権威に指導を仰ぎ、特に、発足当時の基礎固めには月曜会(学内における近代文学の研究)での研鑽が大きな支えとなった。

第一巻では明治三年二月歿のB・J・ベッテルハイム、八田知紀、S・R・ブラウン、J・R・ブラック、成島柳北、森有礼、新島襄、佐佐木弘綱、中村正直ら九名が収められ、以後歿年順に収録された文学者、思想家はこれまでに三百余名を数え、本巻を以て通巻七十冊に及んでいる。その間、第六巻発刊の昭和三十三年に本叢書は菊池寛賞を受賞している。

なお、創刊当初から監修者として叢書の全般にわたりご指導、ご助言をいただいた方ですでに物故された諸先生を左に記して感謝の意を表したい。

秋庭 太郎(演劇学)	池田 亀鑑(国文学)	石田 吉貞(国文学)
石森 延男(児童文学)	上井 磯吉(英文学)	太田 三郎(比較文学)
萩原井泉水(俳文学)	片桐 顕智(和歌文学)	金子 健二(英文学)
金子 武雄(国文学)	河鱈 実英(歴史学)	木俣 修(和歌文学)
木村 毅(比較文学)	斎藤 一寛(仏文学)	坂本由五郎(英文学)

佐々木八郎(国文学)	笹沢 美明(独文学)	佐藤 幹二(国文学)
佐伯 梅友(文法学)	山宮 一允(英文学)	島田 謹二(比較文学)
玉井 幸助(国文学)	辻村 鑑(英文学)	内藤 濯(仏文学)
成瀬 正勝(近代文学)	能勢 頼賢(国語学)	浜 徳太郎(美学)
人見 圓吉(近代文学)	本間 久雄(近代文学)	宮内 秀雄(英語学)
矢野 峰人(英文学)	吉田 澄夫(国語学)	

本巻には、俳人臼田亞浪(明治十二年二月一日〜昭和二十六年十一月十一日)、俳人原石鼎(明治十九年三月十九日〜昭和二十六年十二月二十日)、詩人蒲原有明(明治八年三月十五日〜昭和二十七年二月三日)の、三名の研究調査を収めた。

## 凡 例

一 著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、評論、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げ筆名、筆者名は掲載誌紙の表記にしたがった。

二 年表記載で、調査者が直接あたれなかつた項目については☆印を付した。

三 各稿の末尾に「採訪」と「参考文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表し、また、資料の出所、起稿や修訂にあたって参考にした文献の依拠を明らかにするためのもので、「参考文献」は資料年表と一部重複することがある。

四 表記はすべて現代仮名遣い、常用漢字を用いた。但し、人名は、各研究対象者に限り旧漢字で表記した。

五 引用文の表記は仮名遣いは原文にしたがい漢字は常用漢字を用いた。外国文の場合は訳文または大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記した。

六 年代は日本年号と西暦とで適宜表記し、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いた。





白<sup>びやく</sup>  
田<sup>だ</sup>  
亜<sup>あ</sup>  
浪<sup>ろう</sup>

昭明  
和治  
二十  
六年  
（一  
九八  
五七  
九）  
十二  
月十  
一日  
致生

イ 幼 少 年 期

白田亜浪（本名卯一郎）は、明治十二年（一八七九）二月一日、父文次郎（幼名、佐之助）母さいの長男として長野県北佐久郡小諸町新町（現、小諸市新町）に生まれた。家は半農半商で、祖父市助は鍛冶職であったが、文章にたけた父は役場の書記を務め、第一回の町会議員に出たこともあった。十五年三月、亜浪が三歳のとき、母は（明15・3・5生）を産んでもまもなく産褥熱のために死去。翌年十月、深井かねが後妻として迎えられ、戊二（明19・2・10生）、いとじ（明20・12・8生）、喜和（明25・12・28生）、よし（明30・5・1生）が生まれた。

明治十八年、小諸小学校に入学したが病弱のため一年休学した。家に引きこもりがちで、腕の良い鍛冶職の祖父の影響で彫刻を好み、印章や風景版画を彫って遊んでいた。また、叔父の羊次郎に可愛がられて、野山へ連れていってもらったり、おとぎ話や伝説などを聞くのを楽しみにしていた。この頃、小学校への道筋に、雪見庵（中村）と呼ばれる刺繡ぬいを専門にしていた親類の家があり、その中村嵐松、霞松父子に勧められて俳句を作り、東京の夜雪庵金羅の月並集に一兔の号で投句。△白露や情にはもろき我が涙▽ △秋風や潮瘦目立つ千松島▽が高点で採選された。この時の俳号は本名と音が通じるところから付けたものである。これが病みつきになっ

て、小諸町の光岳寺の月次奉燈句会をはじめ近在の運座をめぐり歩いて多くの賞品を獲得し、同じ雪門の泉柳宗匠の雅の花 月次集などにも投句して句作に熱中した。一方、白田家は達筆ぞろいであったが、亜浪は特に優れていて、天神小僧とか神童とか呼ばれたほどの能筆であり、月並集の小諸成田山奉額句を書いたり、神社の額や店の看板などを揮毫したという(「この道」 俳句の国 昭21・6/「思ひ出」 俳句の国 昭24・10/宮坂古梁 「生家など」白田亜浪先生 昭27・12などに拠る)。

二十七年三月、小学校を卒業して藩儒の角田忠雄について漢籍を学び、翌年に小諸義塾に入学したが、まもなく町役場に勤めた。役場への道すがら本屋で「小日本」を見つけて子規や日本派の新鮮な俳句にふれ、いままでの旧派俳句に疑問を抱くようになった。

## 口 活躍前期

明治二十九年、町役場書記への推薦を固く辞して上京。郷里の先輩の紹介で築地の工談会(工手学校卒業生の団体の北村という人の事務員兼書生となった。会の仕事で東京在住会員の会費を集めに歩くことが多く、その途中、俳句への情熱をもやして子規のいる日本新聞社の前にしばしばたたずんだりした。夜は工手学校予科に通学。しかし数学がどうしても性に合わないため工学的な仕事を諦め、彫刻で身を立てようとしたが彫金家に諭されて断念し、郷里出身の自由党の代議士石塚重平の感化で政治の方面に気持ちがあふくようになった。そこで工談会を出て電話の地下線のマンホール工事の箱番に頼みこんで寄宿し、東京市役所の雇いとなった。三十

一年、明治法律学校（現、明治大学）に入学したが、まもなく無理がたたって肋膜炎を患ってしまった。

郷里で一年ほど静養して三十二年に再び上京。石塚重平の秘書となったが、翌年の春には再び病のため石塚の鎌倉別邸で療養することとなった。この頃、句作への意欲が再燃して日本派風の句をつくったという。三十四年、和私法律学校（現、法政大学）に入学。授業の合間に、近所の与謝野鉄幹に和歌を学んだが、晶子との恋愛事件に嫌気がさして止めてしまい、高浜虚子の教えを受けて、亜浪の号で「文庫」に和歌や俳句を投稿した。

この号は本名の卯と一を縮めて亜の一字とし、郎を同音の浪としたもの（私のペンネーム由来記 雄井 昭5・7）である。十一月、継母かねの長女（かねの再婚の折、かねの実姉の夫の養妹となった）深井すてと郷里で結婚した。

三十六年九月、上京して靖国神社前に羅漢洞という寄宿舎を経営し、郷里の小諸義塾で学んだ青年たちを受け入れた。霸気にあふれた青年たちの談論風発で賑わい、郷友雑誌「羅漢報」を刊行。時評、エッセイ、小説、俳句などに阿羅漢、阿羅漢児、東亜浪客、亜郎、亜楼、啞童などの号を用いて筆をふるった（白田九星の自筆ノート「白田亜浪の足跡」に拠る）。このころ虚子宅をたびたび訪問して教えを受け、秋声会派の句会に出席したり、「国民新聞」に投句したりして句作に打ち込んだが、当時はまだ学生の身であり、「妻と諍つて、一度び俳書といふ俳書を裁ち捨てた」〈歩みのあとをかへり見て〉石楠 大14・3）こともあったという。三十七年一月、「信濃青年」が創刊され、あらたに石楠、北山南水楼、霊の子、二楠などの号を用いて時評、俳句などを毎号執筆し、第五号は編集を担当した。そのほか「宝船」にも投句を欠かさず、多忙な日々であった。石楠の号は、十四、五歳のとき浅間山に咲く石楠花の美しさが浅間の霊花として心に刻みつけられたことに由来し、郷土や自然を愛す

る心を象徴させたものである。七月、和仏法律学校法政大学を卒業。三十八年三月に茅原華山主筆の「向上主義」が創刊され、編集に携わった。そのため羅漢洞には山路愛山、水谷孤剣らが出入りして論陣を張り、日露開戦を控えた時局から注視されたこともあったという。創刊号には「早稲田大学」と題して大学の紹介および評論を掲載し、つづいて諸大学の記事を連載して、『最近学校評論全』（明39・2）として出版した。そのほか小説、詩、俳句なども発表した。しだいに俳句から遠ざかるようになった。

三十九年、羅漢洞を廃止して麴町区紀尾井町へ移住。渡辺国武の知遇を得て電報新聞社に入り、政治部から社会部、「毎日電報」と改称してからは經濟部に転じた。記者として大いに力を発揮し、「蚕業視察記」（毎日電報 明40・5・6、6・11）を二十七回にわたって連載したり、四十年八月には富士山上通信の任をうけて登山し、その記事を「富士道中記」「富士山通信」として「毎日電報」に掲載したりした。同月、恩師の石塚重平が死去。渡辺千冬の選挙のため帰郷した。この間、「活動之日本」にも筆を執り、「侯爵西園寺公望」（明39・1）、「子爵渡辺国武論」（明39・8）などを発表し、ひろく社会的政治的方面での活躍ぶりをしめした。

四十一年九月、一府十県連合共進会が開催され、長野県協賛会東京支部の常務委員として東奔西走の日々が続いた。十一月、「毎日電報」を退き、翌月に「横浜貿易新報」編集長、更に四十二年三月には「やまと新聞」の編集長として手腕を発揮した。四十四年、福山天陰とともに信濃史料編纂会を起し、辻新次男爵を名誉会長に立て、渡辺千秋、渡辺国武ら信州に關係する諸名士の賛助を得て幹事長となり、大著『信濃史料叢書』全五卷（大2・6、3、4）を刊行した。四十五年、四谷区西信濃町五番地に移転し、千代田印刷株式会社を起し

て常務取締役となり、大正二年には佐久鉄道を発起した。

この間、俳句からすっかり遠ざかっていたが、明治四十四年四月ごろから「やまと新聞」に「俳つぶて」と題して寸鉄の言葉に添えた時事吟をしばしば掲載（無署名であるが、「新時代」に北山南水楼の号で同題の時事吟を発表しているところから垂浪と判断）し、「やまと俳壇」の選も担当（大3・5・15から垂浪選の表記）するなど、俳壇への関心が強まっていた。また毎日電報社の武田鷲塘や、やまと新聞社の牧野銀杏庵との関係で俳句雑誌「南柯」の例会に出席し、第二巻五号（大3・5）から選者となり、新風をふきこんだ。一方、著述にも力を注いで『西郷南洲言行録』（明40・12）、『楓関無辺一茶俳句二色評』（明44・8）、『正伝真田三代記』（大2・5）などを出版した。

大正三年、東京市会議員選挙に奔走中、肝臓と膀胱を病み、信州の渋温泉に静養することとなり、社会的政治的な野望を打ちくだかれた。

## 八 活躍中期

大正三年八月、再び静養にでかけた渋温泉で偶然に高浜虚子に再会した。進むべき道を思い悩んでいた垂浪は、俳壇に復帰した虚子に刺激をうけて再び俳句に目を向け、俳壇の行きづまった現状に対してかつての俳句熱、芸術的良心がわきおこってきて俳句に生きる意志を固めた。当年三十五歳。一大転機であった。十月、「俳句に甦りて」を「ホトトギス」に寄稿して俳壇復帰の宣言をおこない、翌十一月に石楠社を創立した。それと同時に各派の人々の共同研究が急務であると考えて、その研究の場として第一回石楠社俳句会を自宅で開

催した。ホトトギス派、新傾向派、秋声会派、木太刀派、月並派ら多彩な人々が集まって成果をあげ、続いて翌月に第二回目を開いた。しかし、二大流派が拮抗しているため共同研究の難しさを悟って、四年三月、自らの所信を徹底させるために大須賀乙字の援助を得て「石楠」を創刊。純正なる民族詩を標榜し、俳壇の革新をかざして各派を痛撃に批判した。(誌名について亜浪自身の読み方は判明せず、当時からセキナン、シャクナゲ、シャクナゲなどと様々なに読まれていたが、昭和十九年五月の「石楠」の原田種彦による「編輯後記」には読み方を正してセキナンであると明記されている。しかし新潮社の『日本文学大辞典』では「しやくなき」となっており、現在の俳諧俳句関係の辞典ではシャクナゲが一般に用いられている。)六月、代々木北山谷一七五に移転。同月下旬から江戸記念博覧会の事務に忙殺された。なお、俳壇に復帰してのち「やまと新聞」の編集長の任をおりて、編集監督兼地方部長となったが、五年の冬に退社して後半生を俳句に託す決意を新たにした。

六年一月、第三巻を迎えた「石楠」を新聞型から菊判に改めて一進展を図り、四月に石楠第一句集『炬火』を刊行して芸術的立脚地を明示した。十一月、『評釈正岡子規』を出版。こうして俳壇における地歩を確立し、しだいに「石楠」の評価が高まってゆくにつれて、新聞の俳句選者の依頼が多くなった。同年四月には「岩手日報」に創設された日報俳壇の選者となり、約七年間にわたって岩手俳壇の指導啓発にあたった。その後、七年には「新愛知」「中国新聞」、八年には「富山日報」の俳壇を担当し、七年前から「新時代」「短詩世界」「花月」「新進文壇」などの諸雑誌にも幅広く筆をとって活躍の舞台を広げていった。なおこの頃「俳句の爲めに俳壇の爲めに」(石楠 大7・10)を発表して、再び俳壇の「党同伐異の現状」を遺憾として共同研究を説



いたが、実現にはほど遠いものがあった。

八年一月、三妹加藤喜和が早逝。子どものない亜浪は六歳の登代子を引き取って慈しみ、のちに登代子の父親も亡くなったため養女として入籍(昭6・4)した。同年春、俳句に対する意見の相違と感情上から内紛が生じて乙字ら一派と袂を分かった。こうして亜浪の独立時代にはいり、意気高揚した時を迎えて、まこと、自然感、広義の十七音などの独自の俳句理論を確立し、多くの代表作を生み出していった。九年一月、乙字の死去を悼んで追悼句会を営み「石楠」四月号を乙字追悼号とした。八月、敬愛する芭蕉の足跡を訪ねて小諸から金沢、福井、富山、糸魚川、柏原へと十七日間にわたって北陸を巡遊した。かねてからの念願の旅であり、これによって「芭蕉の『寂』の底に流るゝまことを体験」(希望「石楠」大10・1)して、決意を新たに俳句の根本的理念として「まこと」を唱道した。続いて十月末には小川芋銭らとともに一茶の故郷柏原を中心に信濃を旅行し、念願の二つの大旅行を果たして充実した年を送った。

十年になると再び「石楠」の内部分争がおこり、風見明成らと袂を分かった。十二年二月、石楠パンフレット第一輯として『俳句を求むる心』を刊行。その後同シリーズの『芭蕉を中心として』(大12・4)、『内容としての自然感』(大12・7)、『形式としての一章論』(昭2・10)などを刊行して俳句理論を明示した。十二年七月、信州中条の夏期林間大学主催による水彩画・俳画講習会の課外講師を担当。九月、関東大震災に遭遇し、本社屋壁の崩落、活版所の焼失という被害にあったが、九月号は遅延ながら発行することができた。十三年三月、三度目の内紛によって短唱をとなえた西村壽骨が脱会したが、「石楠」の基盤は揺るぎなく、結束を新たにし